分科会H

11月12日（木）９：15～12：10／会議室１＋２

座　長　有限会社ウェルフェア　代表取締役　田邉　恒一　氏

座　長　グループホームふかふか・はうす　中津留　美津江　氏

テーマ４：地域貢献・連携、地域拠点・認知症カフェ、認知症伴走型支援、若年性認知症、地域包括ケア・共生社会 等

テーマ７：その他 上記１～６に含まれない取り組み 等

時間	演題 / 副題	所　属	発表者（都道府県）
9：15 〜	食文化交流 アジア３カ国の料理を味わう	グループホーム　ユピテル三田	李　　恩淑 （兵庫県）
9：25 〜	願いや思いの実現。私たちが目指す先に。 また小舟に乗ってあの海へ	認知症対応型生活介護 グループホームこころ	及川　潤子 （宮城県）
9：35 〜	マルチサポートから見たグループホームの優位性 法人を横断して見えてきた違い	ありがとう　マルチサポート	宮守　幸子 （広島県）
9：45〜　発表①〜③　質疑応答（５分間）			
9：50 〜	『ＡＩハナさん』とのナラティブケア 生成ＡＩを活用した認知症ケアシミュレーション	グループホームくれは陽光苑	室田　　純 （富山県）
10：00 〜	グループホームだからできる生活習慣の改善 リコード法を参考にした生活習慣改善の実践	グループホーム　ひまわり	上原　芳美 （群馬県）
10：10 〜	処遇改善加算を活用したケアの創意工夫 イノベーションを現場から	グループホーム「あじさい」	酒井　義文 （愛知県）
10：20〜　発表④〜⑥　質疑応答（５分間）			
10：25 〜	急増！男性入居者	グループホーム　ユピテル三田	三島　理恵 （兵庫県）
10：35 〜	地域をつなぐ「おとなこども食堂」の挑戦 おとなこども食堂から始まった地域共生	グループホーム ここさいむら青葉	阿部久美子 （宮城県）
10：45 〜	地域の人のつながりと居場所づくり オレンジカフェを通して	グループホーム グレイスフル箕輪	鈴木　隆之 （長野県）
10：55〜　発表⑦〜⑨　質疑応答（５分間）			
11：00 〜	地域と繋がれる場所をつくりたい 結カフェの取り組みを通じて	グループホーム ジョイフル各務原	苅谷奈緒美 （岐阜県）
11：10 〜	東松島市における認知症地域支援の実践報告 ～個別支援と地域支援を循環させる認知症地域支援コーディネーターの役割～	東松島市西部 地域包括支援センター	香味　尚之 （宮城県）
11：20 〜	暮らす場所の違う人達の共生 共用デイの始まり。9人以上の人の支援が私達はできるのか	グループホームすずらん日向	鈴木　亮子 （福島県）
11：30〜　発表⑩〜⑫　質疑応答（５分間）			
11：35 〜	「伝える」から「選ばれる」施設へ ～施設の魅力発信と関係機関との連携強化による入居促進の取り組み～	グループホーム もも太郎さん（大郷）	佐藤　文昭 （宮城県）
11：45 〜	利用者主体の役割づくりによる地域参加の促進 本人の意思を尊重した地域参加支援	グループホーム　ジョイフル江南	佐藤　優香 （愛知県）
11：55 〜	「住まい」と「相談」を一体化した地域共生拠点の実践 ―認知症グループホーム・障害者グループホーム・地域包括支援センターの連携―	ぱんぷきん介護センター グループホームみなと筒場	堀内祐洋・高橋香奈 （宮城県）
12：05〜　発表⑬〜⑮　質疑応答（５分間）			
総　評			

演題番号
Ｈ－①

食文化交流

アジア３カ国の料理を味わう

◆キーワード
1　GH で 3 食調理
2　多国籍料理
3　食育

兵庫県・三田市　グループホーム　ユピテル三田（さんだ）

発表者：李（り）　恩淑（うんすく）　　共同研究者：　田辺（たなべ）　智子（ともこ）

平成１５年８月開設　３ユニット２７名のグループホーム。ＪＲ福知山線三田駅から５分程度に立地する。	認知症デイサービス、緊急ショートステイ、定期巡回随時対応型訪問介護看護など、地域密着型サービスを提供する

（取り組んだ課題・はじめに）
「食べる楽しみ」をテーマに、入居者のＱＯＬの改善・向上に取り組んだ。ユピテル三田には４ヶ国(日本、韓国、中国、ベトナム)の職員が働いている。各国の料理を提供するだけでなく、アンケートによる調査や食後の感想などを取り、入居者の食に対する経験や趣向などを再認識・共通認識することで食事を提供するだけに留まらないサービスの改善、ＱＯＬの向上につなげた。

（倫理的配慮）
本発表において個人が特定出来ないように論理的配慮をしている。

（具体的な取り組み）
３カ国の料理、メニューを決める前に入居者にアンケートを取る。韓国、中国、ベトナム料理の共通点として、「辛い」「香辛料」「油っぽい」などがあるので、それらを考慮したものとする。

１．外国に行ったことがあるか（国、都市）

２．辛い物が食べられるか

３．食べたことのある各国の料理は

３ユニットの入居者２７名中２０名に加え、３家族からアンケートが取れる。

アンケートの結果には驚くほど色んな回答があった。外国に行ったことのある方が１３名、辛い物が大好きとの回答が３名、各国の料理を食べたことがあるとの回答が１０名、男性入居者２名は料理名、言語まで話した。

アンケートを参考に提供する料理は
・韓国料理「チャプチェ」
・中国料理「卵トマト炒め」
・ベトナム料理「フォー」
で決定した。３日に分けて昼食として提供する。
韓国のチャプチェは庶民がお祝いで良く食べる春雨料理であり低予算で美味しく楽しめる。
中国の炒め料理は強火で短時間で仕上げる料理で素材の風味が特徴。
ベトナムのフォーは米粉から作る料理でサッパリした麺料理であり、主食のようになっている。

（活動の成果と評価）
各国を担当する職員は、久しぶりの母国料理のための買い物や準備で気持ちはまるで里帰りした時のようであった。
スタッフ含めて４０人分の料理は、なかなか大変だったが、出来上がった料理を入居者の皆さんたちが美味しそうに完食される姿を見て胸がいっぱいになる。
今回はグループホームではなかなか出しにくい麺料理もあり、喜ばれる入居者もいる反面、自力での摂取が出来ない方への対応に工夫が必要だった。
最近は自炊しない施設も増えているようだが、今回のような料理サプライズが出来たのは当施設が一日３食を自炊にて提供し続けて来た成果である。

（今後の課題・考察・まとめ）
食に国境はなく、入居者も職員もみんなが楽しめるテーマになることを知った。今後も色んな国の料理が楽しめるよう、献立を工夫するなど「食事からアプローチするＱＯＬの改善・向上」を目指したい。

演題番号
Ｈ－②

願いや思いの実現。私たちが目指す先に。

また小舟に乗ってあの海へ

◆キーワード
1　願いや思いの実現
2　やるか、やらないか
3　スタッフの気持ち

宮城県・気仙沼市

にんちしょうたいおうがたせいかつかいご　ぐるーぷほーむ　こころ
認知症対応型生活介護　グループホームこころ

おいかわ じゅんこ　おいかわ おさむ
発表者：ユニットリーダー　及川 潤子　　共同研究者：所長　及川　修

グループホームこころは、宮城県沿岸の最北端に位置する気仙沼市にあります。東日本大震災で事業所が全壊し、仮設事業所での事業再開を経て、現在は岩手県との県境にある下八瀬という地区で事業運営しています。施設周辺は緑深い山々に囲まれ、四季折々の移ろいが身近に感じられる環境です。また、少し足を延ばせば美しい三陸の海が広がり、海の幸、山の幸に恵まれた自然豊かな地域です。	入居者の平均年齢は８９歳、平均介護度は 2.2 です。それぞれの自立した生活を目指し、それぞれが役割りを持ちながら、いきいきと輝く生活を送る事が出来るよう、基本理念である「心の通う家」を目指し、生活支援に取り組んでいます。入居者お一人お一人の気持ちに寄り添い、思いを尊重し、思いに応えるまでの傾聴と、関わりの大切さを感じています。心身共に元気で活気溢れる生活は、「また○○がしたい！」「○○に行ってみたい！」という意欲をかき立てる事に繋がるものだと強く感じています。

（取り組んだ課題・はじめに）

今回ご報告させて頂くのは、男性Ｎさん（当時年齢：９２歳　要介護度：３）との関わりについてです。当事業所では、ケアプラン作成時のアセスメントを、計画作成担当者と介護職員が協力して実施しています。Ｎさんの担当職員として、私が生活の意向を確認していた際、普段は「特に何もないなぁ。」と答える事が多かったＮさんでしたが、その時は、「また小舟さ乗って海に出てみたいなぁ。」と、しみじみと話してくれました。Ｎさんは中学を卒業してすぐ、お兄さんを頼りに漁船の乗り組み員となり、世界各国の海でマグロ漁の仕事をしてきました。認知症により普段から不安感が強く、表情も曇りがちでしたが、漁師時代の話をしていた時は、表情も明るく、誇らしげに話していました。また、幼い頃に父親の小舟に乗って釣りをした事や、アワビや魚を突いて獲った事など、大好きな父親との思い出を何度も話してくれました。この「小舟に乗って…。」という言葉に、私達に何か出来る事はないのか、その思いが叶った時、Ｎさんはどんな表情を見せてくれるのか、そしてどんな感情の動きがあるのか。そんな思いが自分の心の中に湧き上がりました。この時、管理者が普段から口癖のように言っている「やるか、やらないかだぞ！」という言葉が私の背中を押してくれました。

（倫理的配慮）

本報告は、ご入所者のプライバシーに十分に配慮し、事例の使用については、ご本人及びご家族の同意を得た上で尊厳を尊重し、作成しました。

（具体的な取り組み）

始めに、Ｎさんの「小舟に乗って」という思いと、担当職員としての私自身の考えを、同僚や管理者に伝えました。そこから徐々に職員全員が「やってみたい！」「実現したい！」という気持ちを共有出来るよう働きかけていきました。９２歳という高齢のＮさん。足腰も弱くなり、安全に乗船出来るのか、体力は大丈夫なのかなど心配はありましたが、職員全員で検討を重ね、法人の理解も得られるよう働きかけました。ご家族も本人の気持ちを尊重して下さり、「そこまで考えてもらって。」と、快く承諾をいただきました。

１０月上旬の風もなく暖かで穏やかな日、いよいよ乗船の日を迎えました。乗船すると、普段の優しいＮさんの表情がどこか勇ましく、「これぞ海の男」といった凛々しい表情に変化していくのを感じました。Ｎさんのご実家がある大島を目指して船を走らせると、「この辺で浜の仕事もしたんだ。」と、当時のことを思い出しているようでした。その一方で、「この辺も随分変わってしまったな。どこだか分からなくなってしまった。」と、震災で大きく変わってしまった景色を寂しそうに眺められ、様々な思いが巡った１時間程の遊覧となりました。

（活動の成果と評価）

日々の会話から何気なく出た一言。そのちょっとした瞬間に、その方の大切な思いに触れることが出来るかも知れません。「寄り添うケア」こそがその思いに応えられる大切な時間です。「やりたい事の実現」に向け、職員の思いが一つになった時、素晴らしい瞬間に出逢えるのだと強く感じました。

（今後の課題・考察・まとめ）

心身の健康の要は、しっかり美味しく食べられる事。元気な心と身体があるからこそ、意欲が沸いてくると思います。その為には、口の健康を維持していく事が大切だと考えます。何歳までも自分の口から美味しく食べ、元気な心と身体の健康に繋がる良い循環が作れるよう取り組んでいきたいと思います。

演題番号
Ｈ－③

マルチサポートから見たグループホームの優位性

法人を横断して見えてきた違い

◆キーワード
1　人材確保
2　業務改善
3　人材育成

広島県・福山市

ありがとう マルチサポート

発表者：介護福祉士（かいごふくしし）・宮守（みやもり）　幸子（さちこ）

2004 年 1 月開設　木造 2 階建　18 人定員 平均介護度 4.0	共用デイ、短期入居実施、各種加算算定 2017 年にリビングオブザイヤーで最優秀賞

（取り組んだ課題・はじめに）
私は介護の世界に携わり 22 年が経過した。現在はマルチサポートとして、デイサービス、ショートステイ、訪問介護、サービス付き高齢者向け住宅、小規模多機能型居宅介護、看護小規模多機能型居宅介護、そしてグループホームなど、多岐にわたる事業所を応援・支援する役割を担っている。この役割は、各職場の急な欠員時の応援にとどまらない。各事業所の職場環境やケアの質を客観的に探り、新人教育のサポートを行い、時に職員の悩み事を聞き精神的な支えとなることである。早朝から夜間までのシフトに加え、必要に応じて夜勤もこなすことで、各職場のリアルな現状や課題、そして現場職員が抱える葛藤を肌で感じてきた。多様な現場を渡り歩いてきたからこそ見えてくる、各介護サービスの共通点と相違点、そしてグループホームが持つ特有の強みや優位性について考察する。
（倫理的配慮）
発表に際し十分配慮し本人・家族の同意を得た。
（具体的な取り組み）
他サービスと同じ部分と違う部分
マルチサポートとして各現場に赴く中で、他サービスと同じ部分と違う部分が見えてきた。まず「同じ部分（共通点）」は、利用者様一人ひとりの尊厳を守り、その人らしい生活を支えるという介護の基本理念である。どの事業所においても、身体介護や機能訓練、生活援助などを通じて、利用者様が安心して過ごせる環境づくりを目指している。一方で「違う部分（相違点）」は、利用者様と関わる時間の長さや目的、そして生活の連続性である。訪問介護は生活の「点」での関わりであり、デイサービスは日中の「面」での関わりである。これに対し、グループホームは「家」としての機能を持つため、利用者様と職員が生活を共にし、24 時間の連続した関わりを持つ点が決定的に違う。また、多くの事業所では時間的制約や人員配置の観点から効率化が求められることが多いが、グループホームは「認知症ケア」という明確な目的のもと、利用者様自身のペースに寄り添うことが比較的許容されている環境であると言える。
（活動の成果と評価）
マルチサポートから見たグループホームの優位性
多数の介護サービスを俯瞰する中で、グループホームには他にはない明確な優位性があると感じている。第一の優位性は、「暮らし」と「ケア」が完全に一体化している点である。少人数で共同生活を送るグループホームでは、食事作りや掃除、洗濯といった日常の家事そのものがリハビリや役割（生きがい）につながっている。施設のような「してもらうケア」ではなく、利用者様が持てる力を発揮し、普通の生活を営むことができる環境が整っている。第二の優位性は、「認知症ケアの専門性と個別性の高さ」である。常に同じ顔ぶれの職員と仲間たちの中で過ごすことで、利用者様は安心感を得やすく、BPSD（行動・心理症状）の軽減につながることが多い。一人ひとりの生活歴や個別性に深く踏み込んだケアが実践できるのは、グループホームならではの強みである。第三の優位性は、「職員のチームワークと柔軟性」である。規模が小さいからこそ、職員同士の連携が密であり、利用者様のちょっとした変化に気づきやすい。マルチサポートとして様々な職場に入る中で感じるのは、グループホームの職員は利用者様のために何ができるかを自分事として考え、柔軟にケアを組み立てる力に長けているということである。
（今後の課題・考察・まとめ）
マルチサポートとして多様な現場を支援する中で、グループホームは認知症高齢者にとって単なる生活の場を超え、その人らしく安心して暮らせる「終の棲家」としての高い価値と優位性を持っていることを再確認した。多様化・重度化する地域ケアの中で、グループホームが持つ「家庭的な環境」「個別ケアの深さ」「専門性の高いチーム力」は今後ますます重要となる。マルチサポートとして培った多様な視点と、22 年間の経験を融合させ、グループホームの優位性をさらに高めるための環境整備や人材育成に貢献していきたい。本発表が、グループホームの魅力と可能性を再認識し、今後の認知症ケアの発展につながる一助となれば幸いである。

演題番号
Ｈ－④

『ＡＩハナさん』とのナラティブケア

生成ＡＩを活用した認知症ケアシミュレーション

◆キーワード
1　生成ＡＩ
2　認知症ケア
3　人材育成

富山県・富山市　グループホームくれは陽光苑（ようこうえん）

発表者（かんりしゃ）：管理者（むろた）　室田（じゅん）　純

グループホームくれは陽光苑は、１ユニットの認知症対応型共同生活介護を提供している。	地域密着型サービス施設として、小規模多機能型居宅介護、小規模特別養護老人ホームを併設している。

（取り組んだ課題・はじめに）

認知症グループホームのみならず、高齢者のケアにあたるには、認知症高齢者とのコミュニケーションは欠かせないものである。しかし、「受容」、「傾聴」、「共感」といったケア技術は、座学による研修では知識として理解できても、実際のケア現場で行動に翻訳することを難しいと感じる人は少なくないのではないか。また、ケアスタッフ同士のロールプレイにおいても、互いに遠慮や気恥ずかしさがあり、伸び伸びとコミュニケーション技術を育むことは困難であると考える。

ケアスタッフが自身で「受容」、「傾聴」、「共感」という対話によるケア技術が正しく実行できたかを振りかえり、その技術を習得できるような訓練、シミュレーションが生成ＡＩを使うことで出来るのではないかと考えた。これは発表者と生成ＡＩの１万文字を超える対話から生まれた途中経過である。

（倫理的配慮）

発表に際し、関係者に書面で説明を行い、同意を得た。個人情報と秘密保持への配慮をした。また、この生成ＡＩによる対話シミュレーションは、ケアの効率化のためではなく、ケアスタッフ自身の関りの質を振り返り、優しさを磨くための「素振り」であることを明確にしておく。

（具体的な取り組み）

生成ＡＩアプリであるGoogle Geminiに、今回の趣旨を説明し、実行可能かを確認した。以降、生成ＡＩとの試行的対話を繰り返し、『認知症高齢者対話シミュレーターＡＩハナさん』を作り上げた。プロンプト（指示文）を作る際の設計要点は次のとおりである。

①設定事例：ハナさん、女性、要介護３、障害自立度Ａ１、認知症自立度Ⅲａ、アルツハイマー型認知症、グループホームに入居して３か月が経過している。入居前は、自宅で夕方、学校帰りの小学生の孫の世話をしていた。グループホームでも午後３時のおやつの時間頃から、帰宅願望の欲求が出る傾向にある。

②ハナさんとの対話は１往復で３分が経過する。上限を１２往復（経過時間３６分）で終了にする。

③「グループホームの午後３時」以外の環境や行動は、ト書きによるアドリブ設定できる。

④ハナさんとの対話のなかで、「受容」、「傾聴」、「共感」が感じられ、ハナさんが落ちついたときは、ハナさん側から「ありがとう。ロールプレイは終わろうね」と話しかけ、終了する。

⑤相手がＡＩであることを悪用し、意図的、かつ明らかにハナさんの尊厳を損なう様な対話を行った場合は強制終了する。

⑥ロールプレイが終了した後は、生成ＡＩが認知症介護指導者として対話を振り返り、使用した言葉と効果の自覚を促すフィードバックを行う。

（活動の成果と評価）

完成したプロンプト『ＡＩハナさん』は、発表者を含めまだ限られた少数しか体験をしていないが、「思った以上に臨場感があった」、「ハナさんに、ありがとうといってもらえて安心した」「いろんなパターンで試してみたい」「他の人の対話も気になる」、「これはスタッフの内省を促すものだね」などの感想があった。また言葉（文字）のやりとりであるが、注視したのは、ハナさんの感情であったのは大きな気づきだった。

発表者自身、『ＡＩハナさん』を体験した後、実際の夜勤現場で、帰宅するためにカバンを探す利用者と対面した際に、シミュレーション通りに利用者と対話ができず、仮想ではない実際の認知症高齢者とのコミュニケーションには時間や環境、スタッフの心の持ちようが影響を与えることを痛感した。失敗が新たな学びに繋がる効果を感じた。今後は、より具体的な成果や評価を報告できると思う。

（今後の課題・考察・まとめ）

分科会当日は、来場者には実際に『ＡＩハナさん』を体験してもらいたいと考えている。そこからまた新たな課題や成果を共有していきたい。

演題番号
Ｈ－⑤

グループホームだからできる生活習慣の改善

リコード法を参考にした生活習慣改善の実践

◆キーワード
1　生活習慣
2　リコード法
3　認知機能

群馬県・前橋市　グループホーム　ひまわり

発表者：看護師・上原芳美（うえはらよしみ）　共同研究者：開設者　高玉真光（たかたままさみつ）・職員一同

理念　家庭的な雰囲気の中で自分の趣味や生活リズムをいかし、その人らしく穏やかな生活を送れるよう支えます。　入居者様の満足を第一に考え「できる力」を大切に支援します。	3ユニット　利用者27名の事業所。開設25周年。 平均年齢：女性90.5歳　男性：89.8歳 平均介護度：2.0

（取り組んだ課題・はじめに）

認知症の予防・進行予防には、バランスの良い食事、適度な運動、質の良い睡眠、口腔ケアなどの生活習慣を総合的に見直すことが重要であるとされている。

ReCODE法（リコード法）は、デール・プレデセン博士が提唱した認知機能の維持・改善を目的とした生活習慣改善プログラムであり、日本では山根一彦博士が日本人向けに実践方法を紹介している。そこで本取り組みでは、リコード法の考え方を参考に、グループホームの利用者を対象とした生活習慣改善に取り組んだ為、その実施内容と実施状況について報告する。

（倫理的配慮）

発表にあたり、個人が特定できないよう配慮し、ご家族に説明し同意を得た。

（具体的な取り組み）

リコード法から改善したい生活習慣をピックアップした。

実施期間：2025年8月～

対象者：利用者２６名

実施内容：①朝起きたら歯磨きをする
②朝食前にお茶を1杯飲む
③食事の初めは、野菜から食べる
④夕食後から寝る前まで3時間空ける
⑤昼間は、体操、個別リハビリ、知的トレーニングをする
⑥調味料の変更　サラダ油から米油へ。白砂糖を甜菜糖へ、他、食材は、添加物の少ないものを選ぶ
⑦朝食のご飯は、白米と玄米を混合する
⑧推奨される食材（ブロッコリー、キノコ類など）をほぼ毎日取り入れる

（活動の成果と評価）

①は、朝起きた時の口腔内細菌を減らすため、歯磨きを声掛けし、約70%の人が実施できていた。
②腸蠕動促進するため、朝食前のお茶に関しては、約70%の人は、飲めていた。
③血糖の急上昇を防止する為、食事の最初に野菜から食べる事に関しては約60%の人が実施できていた。
④満腹の状態で眠ることを避ける為に夕食は18時に摂り、21時ごろの就寝目標であったが、就寝時間は平均20時だった。
⑤体操は、ラジオ体操・ラプレ体操・音楽レク体操等毎日実施出来ていた。個別リハビリに関しては、踵、つま先上げ下げ、膝上げ等、知的トレーニングは、パズル、穴埋め・計算ドリル等利用者に選んでもらい行った。
①～⑤は、目的を説明し実行するかは、利用者の選択に委ね、各ユニットの利用者の状態により実施率に差が見られた。
⑥トランス脂肪酸を減らすためにサラダ油から、米油に変更した。血糖の急激な上昇を防ぐため、白砂糖から甜菜糖へ変更した。
⑦血糖の急上昇を軽減し、食物繊維を摂るため白米に玄米を混ぜ提供した。水分を多く軟らかめに炊飯する事で全員の方が食べられていた。
⑧メニューを作成する時に推奨される食材（ブロッコリー、キノコ類など）が入る様に工夫した。⑥⑦⑧は、施設で提供したので、特に利用者は、意識せずに取り入れられた。

（今後の課題・考察・まとめ）

リコード法を参考にした生活習慣改善を当グループホームで実施した。利用者自身が取り組む生活習慣（起床後の歯磨き、食前の水分摂取、野菜から食べるなど）は、認知機能や理解度の違いにより実施率に差がみられた。一方、食材や調味料の見直しなど施設側が環境を整える取り組みについては、全利用者が実施することができた。

生活習慣改善の効果は、短期間で評価できるものではないため、今後も継続して取り組みを行い、認知機能評価（HDS-Rなど）や血圧・血糖などの健康指標の変化を継続的に評価し、本取り組みの有効性を検証していきたい。

（参考・文献など）

『認知症を防ぐ最高の食べ方』著：山根一彦
KADOKAWA　2024年

演題番号
Ｈ－⑥

処遇改善加算を活用したケアの創意工夫

イノベーションを現場から

◆キーワード
1　処遇改善
2　創意工夫
3　イノベーション

愛知県・名古屋市

ぐるーぷほーむあじさい
グループホーム「あじさい」

さかいよしふみ
発表者：代表　酒井義文

愛知県・岐阜県内に２０施設以上GHを運営しており 職員数　４００名以上	法人理念「しあわせのお手伝い」は職員、会社が一丸となって全世界の皆様に幸せをお届けすることが私たちの役目であると考えています。また、施設理念として「色とりどりのあじさいのようにその人らしく」の実現に邁進しています。

（取り組んだ課題・はじめに）
処遇改善加算が始まったころ、この加算をケアの質の向上と職員のスキルアップにつなげて新しい介護姿を提案できないかを考えて「ホーム担当委員」とネーミングして、ＱＣ的な活動からイノベーションを起こすことが出来るような取り組みをボトムアップ的に現場から発信して、素晴らしい取り組みや実績を横展開することで、グループ全体のケアの質の向上につなげていけないか。また、職員の評価につなげて、昇給や役職候補者としていくための二つの目的で活動を開始した。

（倫理的配慮）
今回の発表はご利用者様の具体的な情報が出ないように職員が取り組みを行ったことに個人名を載せないようにしました。また職員個人名も出ないように配慮しました。

（具体的な取り組み）
処遇改善加算の支給ルールを作成する段階で、ホーム担当委員の実行者に手当を支給する仕組みを作成。Ａ４一枚に６つのカテゴリーよりテーマを自分で選び実行する内容と、利用者様への個別ケアについての取り組みを毎月実行して記述して毎月提出することを実行する。また、取り組み内容によって優秀候補、優秀賞を選び表彰することで、取り組んだ内容を評価、そして一時金、昇給への加点とした。管理責任者は各スタッフの取り組みへの助言、活動提案を行うことで、多くの職員が取り組みに参加して優秀候補や優秀賞を取ることで管理者評価にもつなげている。ホーム担当優秀候補の過去の取り組み集を作成して各ホームに配り、他施設での取り組みを自施設にいかしていただけるようにしています。また、１年間の優秀賞より年間最優秀ランキングをつけて１，２，３位の方には表彰させていただき金一封、幹部忘年会に招待をしています。頑張った方が報われる、評価される仕組みを作っている。

（活動の成果と評価）
１０年以上続けており、現場職員からも頑張れば表彰されたり評価につながることが浸透している。また、考える介護につなげて、現場職員が自ら考え改善や新しいケアの取り組みを実行することで、各ホームの個性的な取り組みが目立つようになり、私たちあじさいグループの施設理念である「色とりどりのあじさいのようにその人らしく」の浸透やご利用者様満足につながっていると思われる。個別ケアではケアプランに沿ったケア、ケアプランを意識したケアにつなげることで、どうしても形骸化するプランを活きたプランにつなげていける取り組みも出てきている。また、素晴らしい取り組みを多く行っている職員のメンター、リーダーへの推薦、当事者も快く役職を受け入れてくれるようになった。また、外国人の方にも日本語で毎月Ａ４一枚日本語を書くことで、日本語の writing 力のアップにつながっています。外国人の中からメンターを担う方も現れた。

（今後の課題・考察・まとめ）
BCP、生産性向上などグループホームで義務化されることが多くなり、生産性向上や接遇、非常災害対策などのカテゴリーを増やして取り組みを増やしているが、テーマとして難しいため、より活動しやすい環境整備が必要とされる。また、施設間での差があり、標準的なボトムアップまでには至っていないため、今後は取り組みの啓蒙を行い、職員自ら率先して取り組みんでいただけるような仕組みにしていきたい。
良い取り組みが横展開して、各ホームでケアの質の向上につなげていけるよう取り組んでまいります。

演題番号
Ｈ－⑦

急増！男性入居者

◆キーワード
1　男性入居者
2　家族との協働
3　ウィルビーイングの実現

兵庫県・三田市　　グループホーム　ユピテル三田（ゆぴてる　さんだ）

発表者：管理者・理学療法士　三島　理恵（かんりしゃ　りがくりょうほうし　みしま　　りえ）　　共同研究者：　田辺　智子（たなべ　ともこ）

平成 15 年 8 月開設　3 ユニット定員 27 名	共用型デイ・共用型・緊急ショートステイ対応 地域に積極的に出ている

（取り組んだ課題・はじめに）
近年当グループホーム（以下、GH）では男性の入居者が増えている。本発表ではそのような背景を踏まえ、男性入居者の家族の関わりの特徴をまとめ、本人の生活にどのような影響を及ぼしているのか事例を通して検討する。

（倫理的配慮）
本発表では、個人が特定出来ないよう倫理的配慮をしている。

（具体的な取り組み～活動の成果と評価）
この 15 年間で男性入居者の比率が高まっている。2011 年は 2/27 名、2019 年は 5/27 名、2026 年は 9/27 名。

月 1 回自宅で過ごしたい事例：78 歳、要介護 3、男性、認知症自立度Ⅳ。妻と 2 人暮らし。他の GH に入居したが、入浴に介護抵抗（暴力）があり退居になったと聞く。その後、当 GH の緊急ショートステイを利用。利用中に空室ができ入所。妻は週 4 回面会し、5 時間程滞在。足が弱らないように妻ならではのリハビリを実施。車椅子を持参しながら散歩に行き、歩ける所まで歩行練習。元々散歩が好きだった本人の希望に沿いながらも上手く歩行を促している。また GH 内の排泄介助も率先して介入。妻は月 1 回の外泊を楽しみにしている。継続できるように妻なりに生活機能の維持に努めている。

毎日一緒に過ごしたい事例：80 歳、要介護 2、男性、認知症自立度Ⅲa。妻と 2 人暮らし。デイサービスを利用しながら在宅で過ごしていたが、妻が体調を崩し緊急ショートステイを利用。その後空室が出来入所。妻は体調回復後毎日面会。午前中は一緒にレクリエーションに参加、午後は自宅に外出し毎日 6 時間以上一緒に過ごしている。同窓会には妻と一緒にスタッフも付き添い参加を支援。地域の催し物に外出することもある。

父のプライドを尊重したい事例：85 歳、要介護 3、男性、認知症自立度Ⅱb、独居。糖尿病あり。息子 3 人は各々県外在住。民間企業で勤務後、教育分野でも活躍。素晴らしい父親で息子は深く尊敬している。入院先の病院からは、認知症は軽度であり、本人は自宅退院を強く希望されていたが、服薬管理が困難となった経緯を踏まえ独居生活の継続は難しいと判断されたと聞く。いくつかある入居先から当 GH を選択されるまでに、息子から 34 の質問があり回答した。入院で弱っているので少しずつ活動的に過ごして欲しい、ノンアルコールビールを飲みたい、好きな時に買い物に行きたい、自宅に外出が可能かといった内容で、ご本人の様々な要望に答え自由に過ごしながらも薬や食事等病気に関することは管理をして欲しいという要望であった。概ね対応可能と回答。柔軟に対応してもらえるということで当グループホームに入居を決断。入居後、ご本人の要望に柔軟に対応し、少しずつ馴染んできていることに息子も安心されている。月に 1 度家族支援の下、自宅へ戻り、住み慣れた環境の中で GH では味わえない食事し、穏やかな時間を過ごす機会を確保している。

その他の事例：毎日ご本人の徘徊のお供をして下さる妻、週 2 回の面会で好きなコーヒーとおやつを一緒に楽しむ妻、父の好物を定期的に届けてくれる娘、本人の要求の物をすぐに届けてくれる姉等

（今後の課題・考察・まとめ）
男性入居者の家族は、入居後も本人との関わりが深く、積極的に支援に関与する傾向がみられる。GH への入居により本人の基本的なケアや生活が安定して確保されたことで、家族は介護負担への不安から解放され、精神的にゆとりを持って本人に関わることが出来る。それらは、本人の生きがいや楽しみの維持にも繋がっている。双方にとって「ウィルビーイングの実現」となっている。今後とも家族との協働を大切にし、本人の希望や生活歴を尊重した柔軟な支援を実践できる GH であり続けるよう管理者として努力していきたい。

演題番号
Ｈ－⑧

地域をつなぐ「おとなこども食堂」の挑戦

おとなこども食堂から始まった地域共生

◆キーワード
1　孤食
2　高齢者の孤立
3　地域交流の減少

宮城県・石巻市　　グループホーム　ここさいむら青葉（あおば）

発表者：管理者　阿部（あべ）　久美子（くみこ）　　共同研究者：職員一同

株式会社ここみケア グループホームここさいむら青葉 認知症対応型共同生活介護 ２０１５年９月開設　定員１８名（２ユニット）	ご入居者様一人一人の個性や想いを大切にし、心を輝かせ、それぞれの色で彩る処でありたい、ご入居者様もご家族も住みやすく通いやすい、そんなあたたかな場所をめざしています。

（取り組んだ課題・はじめに）
石巻市は東日本大震災で甚大な被害を受けた地域である。当施設のある場所は震災後に沿岸部で被災された方々が新たに街を作った新興住宅地であり、様々な地域から移り住んで来た背景から元々の地域のつながりが非常に乏しいという課題を感じていた。また、高齢化が進み子供の数は非常に少ない。更に近年のコロナ禍以降は地域住民同士の交流が更に減少し高齢者の孤独や孤食、地域交流の希薄さは地域ケア会議でも度々議題に上がる問題となっていた。事業所としてもご近所づきあいがほぼない状態であり、施設入居者と地域が関わる機会創出が必要であった。

（倫理的配慮）
演題発表にあたり、入居者様・ご家族に取り組みの趣旨や成果を説明し、了承を得ている。

（具体的な取り組み）
地域の一員として貢献したいという想いと、施設入居者が地域住民と接することで活気ある生活を送って欲しいという願いから「おとなこども食堂」を企画し高齢者から子供まで孤食を防ぎ、他世代間で交流できるようにした。
食堂を開催するにあたっては、第２層協議体に参画し地域住民、民生委員、町内会、他事業所とのネットワーク構築から始めた。
２か月に１度施設スペースを一般に開放して食事を提供する取り組みを開始し、以下のように回を重ねながら工夫した。
第１回：第２層協議会メンバーを招待。地域への周知の第１歩となった。
第２回：食事以外にも楽しく過ごしていただく工夫として地元で活躍するシンガーソングライターに協力を依頼。ボランティアによるライブにより、前回より参加者が増加した。また、チラシを見た地域住民からお米も寄付をいただくなど、活動が地域に受け入れられ始める手ごたえを感じた。
第３・４回：更に交流を促すためのバンド演奏を企画。音楽を目的に多くの住民が集まる場へと展開した。大きな宣伝をしなくても口コミで食堂に訪れる方が増えてきた。初回は９名の参加だったが４回目には２２名の参加となっている。
地域連携の強化：地域包括支援センターや社会福祉協議会も高齢者の孤食問題へのアプローチとして本活動を評価し、チラシ配布などの広報に協力してくれたり、第２層協議体の会報に掲載されたり、地元新聞社が取材に来ることもあった。

（活動の成果と評価）
回を重ねるごとに「地域の輪」が広がる大きな成果が得られた。独居の高齢者から「いつも一人だから楽しく食事が来て嬉しかった」「いつも猫の世話ばかりしているから今日は懐かしい音楽も聴けて感動した」との声が聞かれ高齢者の孤独・孤食の解消に寄与出来ている。施設入居者も地域住民と触れ合い一緒にバンド演奏を聴くことで日常に大きな活気と刺激を得ている。更に入居者の家族も参加してくれるようになり、ご家族も地域コミュニティの輪に加わるきっかけが生まれたことは大きな成果である。また、地域住民から「ただでご飯を食べさせてもらって申し訳ないから」と自発的に敷地内の草刈りボランティアをしていただく出来事があった。他にもヘアカットのボランティアをしたいという声も聞かれている。施設側が地域の役に立ちたいと始めた活動であったが、今では逆に地域の皆様に温かく支えられていると実感している。

（今後の課題・考察・まとめ）
現在は高齢者の参加が中心となっており、当初目標としていた施設利用者と子供達との世代間交流が測れていない。また最近はバンド演奏が目玉となっている側面がある。音楽ベントがない日常的な食堂の運営形態において、どれだけの住民が純粋な交流を求めて集まるのか、地域の潜在的なニーズを見極める側面がある。

（参考・文献など）なし。

演題番号
Ｈ－⑨

地域の人のつながりと居場所づくり

オレンジカフェを通して

◆キーワード
1　認知症
2　地域
3　支え合い

長野県・箕輪町（みのわ）　グループホーム　グレイスフル箕輪

発表者：鈴木（すずき）　隆之（たかし）　　共同研究者：　出羽（でわ）　恵里（えり）

2ユニット18名の入居者様が生活している。平均年齢89歳、最高齢は100歳、平均介護度は1.6のグループホームである。	当施設は長野県南部に位置する上伊那郡箕輪町にあり町を展望する場所にある。他にデイサービスセンター・居宅介護支援事業所・ショートステイホーム・特別養護老人ホーム・生活支援ハウスが併設する複合施設である。

（取り組んだ課題・はじめに）
箕輪町の委託を受け、オレンジカフェを開催している。箕輪町のオレンジカフェ事業計画には、「認知症の正しい知識の普及」「認知症予防･介護予防の提供」「相談支援」「見守りネットワーク作り」がある。
民生委員より、「地域行事に積極的に参加をしていた方がいたが「認知症だから来られたら困る」とご近所さん同士で声を掛けなくなってしまったことがあった。」「認知症であっても地域とつながりを持ち続けて欲しい。このような地域になってしまうことが悲しい。地域で認知症について理解を深めたい。」とご要望があった。
オレンジカフェで認知症の正しい知識・認知症症状がある方の思いや気持ちについて考える機会が持てるよう、今までのオレンジカフェの実施方法を見直し、地域のニーズを取り入れる開催方法を試みた。

（倫理的配慮）
発表にあたり個人が特定できないよう配慮し、地域の方に了承を得た。

（具体的な取り組み）
①グループホーム入居者様がオレンジカフェに参加をする。入居者様に参加をして頂くことで、認知症の症状があっても、いきいきと生活できる姿を知ることができるようにする。
②認知症全般の講義を行う。認知症の種類・症状を説明する。
③グループホーム入居者様の事例を取り入れる。グループホームの入居者様の事例をもとに、日々の生活の様子をお話する。入居者様のできることに視点をおくことで、認知症であってもできることは多くあり、誰かがそばにいることで安心してやりたいことができ、役割を持って生活ができることを知って頂けるようにする。
④「認知症の人が見ている世界」の著書から『食器乾燥機の中に靴が入っていたのはなぜ？』『帰り道がわからない』『夕方になると家を出ようとする』『便を服にこすりつけていた』を題材にして、自分たちにとっては困ってしまう行動であるが、認知症の方にとっては意味のある行動で、その行動の１つひとつには気持ちがあることについて参加者と意見交換を行う機会を設ける。

（活動の成果と評価）
①入居者様の明るく元気な姿を見て、認知症の症状があっても生活の中で役割を持ち、生きがいを感じて生活していることを知って頂くことができた。
②認知症の種類ごとの症状の特徴などについて、理解を深め合うことにより、認知症は脳の病気で関わり方や生活の仕方で元気に過ごすことができることを理解し合うことができた。
③認知症の症状があってもできることは多く残っていること、困ってしまった時に頼れる人がいれば安心して生活ができること、ただとなりに寄り添ってあげているだけでも安心できる場となることを理解し合うことができた。
④自分たちが困った、大変だと思うように認知症の症状がある方の行動にも意味や気持ちがあっての行動であること、その行動から気持ちを理解することの大切さを考えることができた。
⑤毎月実施している運動教室の参加について、地域で声を掛け合うことが増え、地域交流の場を増やすことにつなげることができた。

（今後の課題・考察・まとめ）
箕輪町は、「支え合い、健やかに心豊かに暮らせるまち」を目指して健康や福祉にかかる施策に取り組んでいる。グループホームとして地域にできることを考え、地域の方の声を聞き取り、何かあればすぐに相談できる場所となれるように努めていきたい。

（参考・文献など）

マンガでわかる！認知症の人が見ている世界（文響社）

演題番号
Ｈ－⑩

地域と繋がれる場所をつくりたい

結カフェの取り組みを通じて

◆キーワード
1　地域交流
2　認知症カフェ
3　出来る事、得意な事

岐阜県・各務原市　グループホーム　ジョイフル各務原（かかみがはら）

発表者：介護職・苅谷（かいごしょく かりや）　奈緒美（なおみ）

共同研究者：　グループホーム職員一同（しょくいんいちどう）

自然と町の調和がとれた地域の中で安心とくつろぎを提供。特別養護老人ホーム、デイサービス、居宅支援事業所など事業所を併設している。	１ユニット９名の事業所、設立は平成１５年 平均年齢 80.3 歳　男性２名、女性７名 要介護度平均 2.0

（取り組んだ課題・はじめに）
・利用者様主体で行うカフェを 2025 年１月から月１回のペースで開催し、1 年間準備期間として施設内で活動を続けてきた。利用者様も活動に慣れてきたため、今後は地域の方にもお声かけし、みんなで支えあえる結カフェへ育てていきたい。
・地域の方との繋がりを大切にしたい。
・できない事に目を向けるのではなく、できる事に目を向けていきたい。
・地域の方が困った時や不安な事があった時に、相談できる場所がある事を知ってほしい、思い出してほしいという想いがある。

（倫理的配慮）
・今回取り組みを行うにあたり、利用者様とご家族に説明し同意を得た。また、全国グループホーム大会へ参加するため、写真や記録なども使用させて頂きたい旨を説明し、承諾を頂いた。

（具体的な取り組み）
・今回地域発信へステップアップする為、認知症カフェを開催している同法人から参考資料を取り寄せた。
・職員全員で地域の方にどのように発信していくか話し合いを行い、講話を 20 分程、カフェタイムを 40 分程とした。
・結カフェで行う講話の案を職員全員で考え、年間予定表を作成した。
・結カフェ開催時に地域の方が興味を持ちそうな講話の資料提供を多職種に相談し協力していただいた。
・GH の運営推進会議にて市職員、民生委員の方に説明を行い、協力を仰いだ。
・近隣ケアマネジャーに連絡を取り、結カフェの説明、参加のお誘いをした。
・町内の自治会長に結カフェについて説明、回覧板について協力のお願いをした。
・近隣地域に回覧板にて、結カフェの周知をした。
・町内の行事に参加された地域包括支援センター職員に結カフェのチラシを地域の方に配布していただいた。
・職員全員が結カフェの対応ができるようマニュアル作成を行った。
・温かみを感じていただきたい為、手作りにこだわった。不足しているマグカップやお茶うけ用小皿などの製作を陶芸教室の講師にお願いし、作成した。
・今まで以上に衛生面に配慮した方法に変更した。

（活動の成果と評価）
・ご本人の意思を尊重し参加されるかされないかの選択は利用者様に決めていただく事を優先した。
・結カフェ開催時には地域の方との繋がりを感じる事ができ、初対面の方とも話が弾み楽しい時間を過ごしている様子が見られた。
・結カフェ終了後は利用者様から「たまにはこういう事もいいね」という言葉があった。
・地域に配布や回覧させて頂いたチラシを持ち講話内容を把握されている地域の方がおられた。参加された地域の方から「足腰に効果がある運動をしてほしい」と要望があった。
・近隣ケアマネジャーや他事業所職員、地域の方から応援の声を頂けている。
・結カフェ来設者状況
　3 月 31 日:同敷地内事業所職員 4 名、近隣居宅支援事業所ケアマネジャー3 名
　4 月 19 日：地域住民 4 名
　同敷地内事業所職員 3 名
　5 月 17 日：地域住民２名、利用者様ご家族１名

（今後の課題・考察・まとめ）
・職員全員が結カフェに対応できるよう順次引継ぎを行っていく。わからない事があった場合や改善点がある場合は職員全員で話し合い、検討・対応していく。
・地域の方に「これなら家でもできるね」と在宅でも取り入れていただけるような講話を提供していきたい。
・今後も継続し、気軽に来れる場所や困った時に思い出して頂けるような存在として地域に根付いていきたい。

演題番号
Ｈ－⑪

東松島市における認知症地域支援の実践報告

～個別支援と地域支援を循環させる認知症地域支援コーディネーターの役割～

◆キーワード
1　新しい認知症観
2　認知症地域支援コーディネーター
3　個別支援と地域支援の循環

宮城県・東松島市

ひがしまつしましせいぶちいきほうかつしえんせんたー
東松島市西部地域包括支援センター

しゃかいふくしし・ひがしまつしましにんちしょうちいきしえん
発表者：社会福祉士・東松島市認知症地域支援
こーでぃねーたー　かみ　なおゆき
コーディネーター　香味　尚之

東松島市西部地域包括支援センターでは、保健師・社会福祉士・主任介護支援専門員等の専門職が連携し、高齢者の総合相談、権利擁護、介護予防支援、包括的・継続的ケアマネジメント支援を実施している。	本発表の要となる「認知症地域支援コーディネーター」を配置し、個別支援と地域支援の両面から認知症施策を推進する。

（取り組んだ課題・はじめに）
認知症施策推進基本計画では「新しい認知症観」のもと、認知症のある人が住み慣れた地域で自分らしく安心して暮らし続けられる地域づくりが求められている。一方で、診断直後の社会的孤立（空白の期間）や、進行に伴う介護負担の増大が地域における大きな課題となっている。本報告では、パーソン・センタード・ケアの考え方を基盤に、本人や家族の生活歴、価値観、人とのつながりを尊重して多職種・地域住民と協働する「認知症地域支援コーディネーター」の実践について、具体的な事例から報告する。

（倫理的配慮）
利用者本人および家族へ発表の趣旨を説明し同意を得た。また、個人が特定されないよう内容を一部加工した。

（具体的な取り組み）
【事例：社会的孤立からの再接続（空白の期間の防止）】 診断を機に仕事の退職と免許返納を経験し、社会とのつながりを失いかけた独居男性の事例。非常に強い喪失感を抱えるご本人に対し、継続的な訪問による信頼関係の構築に努めた。本人のペースを尊重しながらチームオレンジや認知症カフェ等の地域資源へつなぐことで、社会参加を継続し、「空白の期間」を生じさせることなく地域生活を維持することができた。

（活動の成果と評価）
こうした実践により、社会参加の継続や在宅生活の維持に繋がった。また、個別支援の現場で得られた課題や当事者の思いを、地域づくり（認知症カフェや当事者活動など）へ還元することで、地域資源の充実とネットワークの強化につなげることができた。

（今後の課題・考察・まとめ）
新しい認知症観の実現には、一人ひとりの生活歴や価値観を理解し、その人らしい暮らしを支える視点が重要である。「個別支援が地域支援を育て、地域支援が再び個別支援を支える」という循環を、今後も地域で推進していきたい。

（参考・文献など）
厚生労働省『認知症施策推進基本計画』、トム・キットウッド『認知症のパーソン・センタード・ケア』、水野裕関連文献。

演題番号
Ｈ－⑫

暮らす場所の違う人達の共生

共用デイの始まり。9 人以上の人の支援が私達はできるのか

◆キーワード
1　共用デイ
2　在宅支援
3　グループホームケア

福島県須賀川市　グループホームすずらん日向（ひなた）

発表者：　ケアワーカー　鈴木（すずき）　亮子（りょうこ）　　共同研究者：　内藤（ないとう）　貴子（たかこ）

特定非営利活動法人豊心会が居宅・訪問介護・デイサービス 3 箇所・グループホーム 4 箇所を福島県須賀川市にて運営している。法人グループホームの新たな取り組みとしてすずらん日向は 2023 年 3 月に認知症対応型通所介護（共用型）を始めることになった。その他 3 事業所もそれぞれ事業所の環境面などの特徴から、緊急ショートステイ、共用デイサービスをそれぞれ開始。	2004 年 8 月に須賀川市日向町に法人 2 箇所目のグループホームとして開所。2023 年共用デイサービスの指定を受ける。2025 年より本格的にサービスを開始し毎日 1～2 名の方が利用されている。

（取り組んだ課題・はじめに）
2025 年 2 月から共用デイサービスを開始し 1 年半程経過する。共用デイを始める際なぜグループホームでデイサービスを行うのか、グループホームの入居者さんの支援だけでも大変なのになぜそれ以外に在宅の方を受け入れるのか、大変になるだけではないかと思った。開始当初来所された方が「つまらない」「こんなデイサービス初めてだ」と話されていたが、現在は日向の環境にも慣れて他の入居者さんとのコミュニケーションも図れるようになった。グループホームの生活の中に、在宅で生活している利用者さんが入ってくる事でのお互いの良い部分、課題となる部分、共用デイを今後続けるにあたって今回の発表をきっかけに一度振り返りより良い形を作っていきたいと考えたので報告したい。

（倫理的配慮）
今回の発表にあたり、ご利用者様、ご家族様に写真等の使用について説明し承諾を得ている。

（具体的な取り組み）
共用デイの役割について管理者より説明を受け、利用者の方を受け入れる体制の準備をした。連絡帳の書式の作成や持参された荷物は何処に置くか、下駄箱はどうするかなど細かい準備があった。職員はどう受け入れたら良いのか分からず試行錯誤だったが、グループホームの入居者さんはあまり驚かず迎え入れてくれた。利用者を受け入れ始めた頃は家から通う人がいて入居者さんの気持ちが不安定にならないかという心配と、仕事量が増えて業務は回るのか、大変になるのではないかと不安な気持ちだった。しかし性格の違う色々な方がデイに通われる中で、お互いに顔見知りになり、朝来ると「会いたかったよ」帰る時は「また来てね。明日ね」と言葉を交わす。ただ「帰る家があっていいね」「娘と一緒でいいね」とうらやましくなる方もいた。通いの利用者の方につきっきりになってしまうと「ほっときなさいよ」という方もいた。

（活動の成果と評価）
試行錯誤の毎日だったがその方に合った支援を考えるようになり、また職員同士の情報共有も大切にするようになった。デイの利用者の為と始めた活動が入居者の方の活動にも繋がった。利用者の家族さんとの関係では、家族さんが送り迎えに来られた際に話をする機会がある。自宅での悩みや不安を聞くことがあり、担当ケアマネに繋いでいる。送迎がない事のメリットで、関係の構築に繋がり最近では家族さんがボランティアにも来てくれるようになった。受け入れるグループホームの入居者さんにとってデイの方を受け入れる事での生活のしづらさが生まれているのかはもう少し利用者を受け入れる中で見えてくると思う。

（今後の課題・考察・まとめ）
共用デイを利用する理由は利用者さんによって様々だと思う。利用する理由は様々であっても私たちが支援する目的は変わらないと思う。通ってくる日向の時間が過ごしやすければ良いわけではなく、自宅に戻った後の生活が少しでも良い状態になることが日向の役割だと思うので、今後もグループホームの環境で利用者を受け入れるために、もう一度共用デイの意味を職員全体で理解する事、在宅支援の中でのグループホームの役割を理解することから始めていきたい。またグループホームの入居者さんにとっても共生する事での良い環境を作っていきたい。共用デイを利用する認知症のある方たちが在宅で少しでも長く生活することができるように日向として何ができるのか、在宅支援を支えるチームの一員としての役割が果たせるように、これからも職員みんなで考え、関わっていきたいと思う。

演題番号
Ｈ－⑬

◆キーワード
1　地域連携
2　情報発信
3　信頼関係

「伝える」から「選ばれる」施設へ

～施設の魅力発信と関係機関との連携強化による入居促進の取り組み～

宮城県黒川郡大郷町　グループホーム　もも太郎（たろう）さん（おおさと）（大郷）

発表者：ケアマネジャー・佐藤（さとう）　文昭（ふみあき）

認知症のある高齢者の方が家庭的な環境の中で安心して生活を送ることができる 2 ユニット 18 名定員の認知症対応型共同生活介護事業所です。少人数による共同生活を通じて、お一人おひとりの生活歴や価値観を大切にし、「できること」を活かしながら、自分らしい暮らしを続けられるよう支援しています。 介護・医療・ご家族・地域との連携を大切にし、笑顔あふれる穏やかな毎日を提供するとともに、住み慣れた地域で安心して暮らし続けられる環境づくりに努めています。	家庭的で温かな雰囲気の中、ご利用者様一人ひとりのペースを尊重した生活を大切にしています。 施設内は全館バリアフリーとなっており、安全で快適に生活できる環境を整備しています。また、協力医療機関との連携体制を整え、健康管理や緊急時にも安心して生活していただけるよう支援しています。 「家族・地域との絆を大切にし、穏やかで笑顔あふれる生活を送れるよう支援します。」という理念のもと、ご利用者様を中心に、ご家族や地域の皆様とともに歩む施設運営を目指しています。

（取り組んだ課題・はじめに）

当施設では、入居率の低下や待機者数の減少が課題となっていた。地域には介護を必要とする高齢者がいる一方で、施設の特色やサービス内容が十分に地域へ伝わっておらず、相談件数や見学者数が伸び悩んでいた。

また、安定した施設運営を継続するためには、新規入居者と待機者の確保が重要である。そこで、地域への情報発信や関係機関との連携強化、施設見学や広報活動の見直しを行い、入居相談件数および待機者数の増加を目的として取り組んだ

（倫理的配慮）

今回の発表にあたり、利用者本人・家族へ説明し承諾を得た。

（具体的な取り組み）

施設パンフレットや広報資料を見直し、アプローチブックを作成し施設の特色や生活の様子が伝わる内容へ改善し、新規入居者・待機者の獲得を目的として、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、病院の医療相談員への定期訪問を実施した。

また、SNS を活用して日常生活の様子や行事を発信するとともに、施設見学や体験利用をできるようにし、安心して入居を検討できる環境づくりを行った。また、ご家族、ご本人が将来に不安が無いよう認知症相談窓口を設置した。

（活動の成果と評価）

アプローチブックを作成したことにより、一目で施設の活動内容や利用者様の生活状況がわかるようになった為、関係機関から「施設の特徴が分かりやすくなった」「相談しやすくなった」との意見も得られた。また、関係機関の担当者から直接ご本人、ご家族にアプローチブックを見て頂けるため、「わかりやすく説明がしやすくなった」とも意見も得られました。また、継続的な訪問と迅速な対応が信頼関係の構築につながり、新規入居者・待機者の確保に一定の効果があったと考える。今後も継続した情報発信と地域との連携強化が必要である。

（今後の課題・考察・まとめ）

今回の取り組みにより関係機関からの相談件数等増えてきているが、今後は地域住民を対象とした施設見学会や認知症カフェ、地域行事の参加等を通じて施設の認知度向上を図る必要がある。

定期的な訪問や継続的な情報発信により、関係機関との信頼関係が深まり、施設の特色や支援内容を理解してもらえたことが新規相談の増加に繋がったと考えられる。また、問い合わせへの迅速な対応や見学時の丁寧な説明は、利用者や家族の安心感につながり、入居決定を後押しする要因になったと考えられる。

新規入居者・待機者の獲得には、営業活動だけでなく、地域との信頼関係の構築や施設の魅力を継続的に発信することが重要である。今後も地域に必要とされる施設を目指し、多職種や関係機関と連携しながら、ご利用者・ご家族に選ばれる施設づくりを継続していきたい。

（参考・文献など）

なし

演題番号
Ｈ－⑭

利用者主体の役割づくりによる地域参加の促進

本人の意思を尊重した地域参加支援

◆キーワード
1　役割をつくる
2　暮らしのいきがい
3　地域との繋がり

愛知県・江南市

ぐるーぷ　ほーむ　　じょいふるこうなん
グループホーム　ジョイフル江南

さとう　ゆうか
発表者：佐藤　優香

しょくいん　いちどう
共同研究者：　職員一同

愛知県の北東部に位置し、近くには、一級河川の木曽川が流れ温暖な気候・風土で穏やかに暮らせる最適な環境です	1ユニット、女性9名、平均要介護2.00、 平均年齢85歳 職員構成：女性7名　男性1名 平均年齢40代前半

（取り組んだ課題・はじめに）
グループホーム ジョイフル江南では、近隣に高齢者施設や小学校が立地しており、地域との関わりを持ちながら生活できる環境が整っている。その中で、「利用者がいきがいや役割を感じられる場をつくる」ことを目的に、地域参加を促進する取り組みを開始した。取り組みの出発点として、利用者アンケートを実施し、利用者の意思や希望を把握した。アンケートでは、いきがいにつながる4つの項目で聞き取り調査を実施し、「子どもと遊ぶこと」「食事をつくること」「何か物をつくること」「畑仕事」など、利用者がいきがいとして感じやすい、好きなこと・得意なことが明らかになった。また、「人の役に立ちたい」など、社会との関わりを望む声も聞かれた。
アンケート結果をもとに、利用者主体の役割づくりを行い、いきがいの向上につながる地域参加の活動を検討した。

（倫理的配慮）
・研究発表に際し、利用者・ご家族に取り組みの趣旨や成果を説明し、了承を得る。

（具体的な取り組み）
アンケート結果から導いた「好き・得意・やりたいこと」を基盤に、以下の4つの役割を設定し、地域活動へと展開した。
1.交流・見守りの役割
「子どもと遊ぶこと」「子どもに迷惑をかけないようにしたい」という思いから、交通安全パトロールや保育園・学校との交流を実施した。
2.接客・サービスの役割
「食事をつくること」「接客経験がある」という強みを活かし、モーニング提供や声かけなどのサービス活動を行った。
3.創作・表現の役割
「何か物をつくること」「歌・ハーモニカが得意」という特性を活かし、作品制作や展示会、音楽交流を実施した。

（活動の成果と評価）
活動を通して、利用者の意欲やいきがいが大きく向上した。
1.交流・見守りの役割
「地域の子どもたちと交流することで、子どもたちを見守る大切な役割を担い、その活動が日々の生きがいになっている。」 子どもとの関わりが、利用者の自己肯定感や役割意識を高める結果となった。
2.接客・サービスの役割
「食事を作るのが好き」と「人の役に立ちたい」という気持ちが活動と結びつき、生活の中で役割として発揮されている。 得意なことが地域貢献につながることで、継続的な意欲が生まれた。
3.創作・表現の役割
「好きなものづくりが日々の習慣となり、表現活動として広がり、さらに展示会での交流へとつながった。」 創作活動が自己表現の場となり、地域との新たなつながりを生み出した。

（今後の課題・考察・まとめ）
アンケートを基盤とした役割づくりにより、利用者の意欲やいきがいを引き出し、地域参加を促進することができた。しかし、活動の継続性や新たな役割の創出、地域との連携強化など、今後の課題も残されている。
共生社会の実現には、利用者が地域で活躍できる場づくりが不可欠である。今後も、本人の意思を尊重しながら、地域と協働した活動を広げていくことで、より豊かな生活の実現を目指す。

（参考・文献など）
特になし

演題番号
Ｈ－⑮

「住まい」と「相談」を一体化した地域共生拠点の実践

―認知症グループホーム・障害者グループホーム・地域包括支援センターの連携―

◆キーワード
1　共生社会
2　地域包括ケア
3　認知症伴走型支援

宮城県・石巻市

ぱんぷきん介護センターグループホームみなと筒場（かいご　どうば）

発表者：堀内（ほりうち）　祐洋（まさひろ）・髙橋（たかはし）　香奈（かな）

ぱんぷきん介護センターの３つ目の認知症グループホームとして、「石巻みなとステーション」内に令和５年４月に新設。	「石巻みなとステーション」は、1階に当認知症グループホーム２ユニット（18名）、地域包括支援センター、2階に障害者共同生活援助（10名定員・女性のみ）がある。

（取り組んだ課題・はじめに）

当法人は、石巻市から委託を受け、平成 18 年度より地域包括支援センターを運営してきた。認知症に関する相談は年々増加し、高齢者支援にとどまらず、8050 問題をはじめとする複合的な課題を抱える世帯への相談支援も数多く担っている。このような現場経験を通じて、高齢者福祉と障害福祉を切れ目なくつなぐ地域共生型の支援体制の必要性を強く実感してきた。

こうした課題を踏まえ、令和５年４月、「親と子が、最後まで地域でともに安心して暮らせる伴走支援拠点」をコンセプトに、認知症グループホーム、障害者共同生活援助（障害者グループホーム）、そして地域包括支援センターを一体的に整備した「石巻みなとステーション」を開設した。制度の枠を超えて、高齢者・障害者・家族・地域をつなぐ地域共生の拠点として歩み始め、今年で開所４年目を迎えた。

本報告では、石巻みなとステーションが地域とのつながりの中で実践してきた取り組み、その成果、さらに今後の地域共生社会の実現に向けた展望についてご紹介したい。

（具体的な取り組み）

開設にあたり、地域住民を対象とした住民説明会や内覧会を開催するとともに、居宅介護支援事業所等のケアマネジャーや障害福祉分野の相談支援専門員に対し、当ステーションのコンセプトを発信した。

開設後は、地域包括支援センターが培ってきた介護予防活動のノウハウを活かし、認知症グループホームを地域に開かれた交流の場として活用している。定期開催している介護予防教室「ふれあい会」では、ノルディックウォーキング、ふまねっと運動、夏バテ・熱中症予防のおやつづくりなどを実施し、地域住民の健康づくりを支援するとともに、入居者と地域住民が自然に交流できる機会を創出している。

また、2か月に1回開催する運営推進会議では、町内会や民生委員、地域住民との意見交換を継続し、地域行事への参加や、防災・減災への取組について協議している。特に津波災害を想定した BCP（業務継続計画）の策定では、地域の実情を踏まえた助言を受けるなど、地域とともに施設を育てる運営を意識している。

（活動の成果と評価）

① 地域とのつながりを維持したまま住み替えを実現

地域包括支援センターが長年支援してきたサロン活動に参加していた独居高齢女性が、認知症の進行に伴い認知症グループホームへ入居された。入居後もサロンの仲間が定期的に面会に訪れ、交流が継続している。住み慣れた地域とのつながりを維持したまま生活を継続できたことは、「地域の中で暮らし続ける」という伴走支援拠点の理念を象徴する事例となった。

② 地域住民と入居者が日常的につながる拠点へ

「ふれあい会」は、介護予防だけでなく、地域住民と入居者が顔の見える関係を築く交流の場として定着している。開催を重ねるごとに参加者は増加し、「気軽に立ち寄れる場所」として地域に認知されつつある。入居者の中には開催を心待ちにする方も多く、生活の楽しみや社会参加、生きがいづくりにつながっている。

③ 地域の一員として地域活動へ参加

町内会や民生委員との継続的な関係づくりにより、地域行事への参加機会が広がった。入居者は地域住民とともに公園の花壇づくりや石巻市総合防災訓練（シェイクアウト訓練）へ参加し、「支援される側」ではなく「地域を支える一員」として地域社会とのつながりを深めている。

④ 制度の切れ目をなくす伴走支援を実現

障害者グループホーム入居者が 65 歳を迎えた際には、地域包括支援センターが早期から相談窓口となり、介護保険サービスへの移行を円滑に支援する。介護・障害の専門職が同一拠点に配置されていることで、制度変更による不安や負担を最小限に抑え、切れ目のない支援を実現することができる。

（今後の課題）

地域とのネットワークを強化し、障害の子を持つ高齢の親からの相談に対して地域包括支援センターが初期相談を受け、障害福祉の相談支援事業所へ速やかにつなぐことで、介護と障害福祉の双方が連携した支援体制の構築が求められる。「8050 問題」に代表される複合的課題に対し、地域の総合相談窓口として機能を充実させる必要がある。